

山形大学人文学部研究年報 第11号 (2014. 3) 69-86

Think different の言語学

— 創造的逸脱表現を支える文法のしくみ

鈴木 亨

1. はじめに

創業者 Steve Jobs の復帰に伴い1997年から展開されたアップル社の広告キャンペーンは、その後のアップル社の成功にとって大きな要因となったといっていよいであろう。¹ そのキャンペーンにおいて採用された宣伝文句 (tagline) の「Think different」は、多くの人の記憶に残るものとなった。本稿では、この宣伝文句の背景を言語学的に分析することにより、人間の言語活動における制約の体系としての文法とそこから逸脱表現が創造されるしくみについて考察する。

2. 逸脱表現としての「Think different」

標準的・規範的な英語の文法に照らしてみると、この「Think different」という表現は、ある種の逸脱表現ではないかと思われる。広告の原文では、ピリオドがついていること、2つ目の単語 different の頭文字が小文字になっていることから、この表現が形式的には think を主動詞とする命令文であることを前提として、その文法的解釈には大まかに次の3つの可能性が考えられる。

- [A] 形容詞 different に後続する何らかの目的語が省略されている可能性
- [B] 形容詞 different がそのまま単独で動詞 think と組み合わせられる可能性
- [C] 形容詞ではなく、副詞として different が解釈される可能性

以下では、この3つの分析可能性について順番に検討し、それぞれの可能性が単独ではこの表現を特徴づける決定的な説明にはならないことを確認し、その上で、複数の文法的・語彙的・語法的要因が相互に関連しつつ、複合的にこの逸脱的表現の使用を支えていることを論じる。

1 このキャンペーンの背景と内容、その後の展開については、Wikipedia (英語版) の「Think different」の項、および Steve Jobs の評伝 (Isaacson 2011) を参照。

3. Think different はどこが逸脱的であるのか

3. 1. 目的語の省略

動詞 think のあとに、形容詞 different を修飾語とする名詞句があり、その主要部の名詞が省略されているという可能性を考えてみよう。例えば、Think different ideas のように ideas という名詞を補ってみる。一見意味は通りそうだが、いくつか問題がある。

まず、英語では修飾語の形容詞だけを残す名詞の省略は一般に許されない。

- (1) a. *From the window, you can see beautiful ~~mountains~~.
- b. *I solved difficult ~~problems~~.
- c. *We ate very big ~~hamburgers~~.

定冠詞 the と形容詞を組み合わせ、一般的な人やものを指す名詞 (things や people) が省略されていると見なすことのできる用例はあるが、その場合は、まさに定冠詞 the の存在が必要不可欠である (イタリックは本稿執筆者による)。

- (2) *The beautiful* are found in the edge of a room crumpled into spiders and needles and silence and we can never understand why they left, they were so beautiful. (Charles Bukowski)

さらに、動詞 think は基本的に自動詞なので、思考の対象となるものは、通常前置詞を伴って表されなければならない。

- (3) a. Let's think *(about) it later.
- b. I'm always thinking *(of) you.

つまり、仮に省略されていたとしても、その名詞句主要部を復元した Think different ideas のようなかたちは、もともと文法的に容認される形式ではない。

動詞 think が例外的に目的語をとる例として、同族目的語構文の可能性についても、念のため確認しておこう。同族目的語構文は、通常自動詞として用いられる動詞に、語彙的に同型の名詞が目的語として生じる構文である。

- (4) a. She laughed a hearty laugh.
- b. He dreamed a beautiful dream.

動詞 think に関しても、同族目的語は可能であるが、母音変化により目的語は think ではなく thought になり、さらに複数形が用いられることも多い。

- (5) a. I simply lacked the courage to think that thought. (Paul Auster, *The Book of Illusions*: 301)
b. Don't think negative thoughts.

同族目的語構文では、一般的な制約として目的語に形容詞などの修飾語がつくが、その修飾語を残して目的語の名詞だけを省略するかたちは認められない。

- (6) a. *She laughed a hearty laugh.
b. *He dreamed a beautiful dream.

したがって、同族目的語構文の中で、think に限って目的語名詞の省略によって修飾語の形容詞だけを残すかたちが派生されるという説明は、少なくともそのままでは成り立たない。

3. 2. 形容詞を伴う感覚動詞と結果変化動詞の構文

次に、動詞に後続するのが、目的語ではなく、形容詞 different のみであり、全体として自動詞構文であるとする分析には、2つの検討すべき可能性がある。1つは、感覚動詞（知覚動詞）を中心とする文、もう1つは、結果含意動詞を中心とする文である。²

感覚動詞が自動詞として形容詞を伴って生じる文は、視覚、聴覚などの五感を通じて捉えられる事物に関する属性の評価・認識を表す。³ この場合、動詞は連結詞 (copula) として主述関係を仲介する役割を果たし、形容詞の方が主語である事物の属性を直接描写する一次述語として機能するので、(7) に対して (8) のように、これを省略することは通常できない。

- (7) a. My head feels heavy.
b. You look tired.
c. This room smells stale and musty.
d. Christmas in Hawaii sounds nice.
e. This cake tastes good.
(8) a. *My head feels heavy.

2 本稿では、sleep naked や run barefoot のような描写句 (depictive) としての分析可能性は、自明のものとしてあらかじめ排除して考える。

3 Taniguchi (1997) によると、歴史的には、これらの動詞の形容詞を伴う自動詞用法は、知覚刺激の放出を修飾する副詞を伴う知覚活動の表現から、知覚の効果を対象に帰する属性評価の表現に発達してきたとされる。

- b. *You look tired.
- c. *This room smells stale and musty.
- d. *Christmas in Hawaii sounds nice.
- e. *This cake tastes good.

また、感覚動詞の意味特性の反映として、命令文になりにくいということが挙げられる。これは、個人の内面に生じる感覚の認識は、他者からの命令の対象となりにくいからである。(9)は命令文としての容認性の判断を示している。

- (9) a. *Feel heavy.
- b. *Look tired.
 - c. *Smell bad.
 - d. *Sound nice.
 - e. *Taste good.

Think different の例に立ち戻ると、動詞 think は一般に、いわゆる感覚動詞ではなく、believe, expect, understand などと同類の認識動詞として分類され、that 節や不定詞節を補文とするという統語上の特徴を共有する。⁴ また、先に述べたように、問題の文が命令文として使われているのは明らかで、その点でも感覚動詞に形容詞が後続する事例と考えることは難しい。仮に、あえて感覚動詞として構文的な意味解釈をしようとしても、「(自分のことを) 人と違っていると考えよ」というような意味となり、そのメッセージの意図は不明である(広告メッセージの解釈については後に詳しく触れる)。

残されたもう 1 つの構文解釈可能性は、(10) のような変化を表す結果含意動詞とその結果を詳述する形容詞の組み合わせと考えることである。

- (10) a. They arrived late.
- b. The box broke open.
 - c. He died young.
 - d. The lake froze solid.
 - e. The light turned red.

(10) では、動詞が、位置あるいは状態に関する変化の事象を表し、形容詞は、主語に関して結

4 ただし、認識動詞の中でも think はやや例外的に、eat や talk などと同様に進行形になりやすいなど、活動動詞としても許容されやすい。

果として成立する状態について詳しい情報を加えるものと解釈される。この場合、形容詞は、動詞が含意する結果変化についての補足説明なので、形容詞がなくてもそれぞれの文は基本的に成立する。

- (11) a. They arrived (...and they were late.)
b. The box broke (...and now it is open.)
c. He died (...and he was young.)
d. The lake froze (...and it became solid.)
e. The light turned (...and now it is red.)

この構文における動詞の役割は、事象アスペクト的に完結相 (telic) の枠組みを定めることであり、動詞はそれぞれ特定の結果を含意する変化事象を意味する。

しかし、このような構文解釈を Think different に当てはめるには、まず、動詞 think が何か特定の変化や結果を含意する動詞ではないということが問題となる。(12) が示すように、行為としての thinking は、主語や補部（前置詞つきの目的語）に関して特定の変化を含意するとはいえない。

- (12) I thought about it for a while, but no good idea came to me.

アスペクトに基づく動詞分類では、(10) の動詞類は、(13) のように内在的に完結性を持つ到達動詞 (achievement)、あるいは達成動詞 (accomplishment) として分析されるのに対し、think の場合は、(14) に見るように活動動詞 (activity) のふるまいを示す。

- (13) a. The box broke {in/*for} five minutes.
b. He died {in an instant/*for five minutes}.
c. The lake froze {in/*for} five hours.
(14) He thought (about it) {*in/for} five minutes.

このように動詞 think が結果を含意する動詞ではないことから、(15) に関して、「(いろいろ) 考えて怒る」や「(いろいろ) 考えて幸せになる」というような結果解釈は成立しない。さらに、(7) で見た感覚動詞のように、動詞と同じ主語を形容詞にも補って自己認識を表すような解釈（「自分が怒っていると思う」、「自分が幸せだと思う」）も許されない。

- (15) a. *I think angry.
b. *He thought happy.

後者の解釈については、主述関係を内包した小節構造 (small clause) が補部となる次のような例と比較されたい (例文中のイタリックは本稿執筆者による)。

- (16) a. But you may *think me merely biased* if I say that my own father could in many ways be considered to rank with such men... (Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*: 34)
b. He laughed politely, though he must have *thought me profoundly stupid*. (Ian McEwan, *Atonement*: 362)

(16) では、形容詞述部に対する主語が明示されることで、think の認識対象としての命題 (主述関係) が過不足なく表現されている。

以上の観察から、Think different における different を形容詞と見なし、感覚動詞、もしくは結果変化動詞と組み合わせる解釈、すなわち、動詞 think に形容詞を直接組み合わせる表現形式は、一般的な英文法の枠組みでは許されていないということがわかる。

3. 3. 形容詞と副詞—単純形副詞としての different の分析可能性

ここでは、Think different における different を副詞として分析する可能性を検討してみよう。事実、その可能性を示唆する証拠は、この宣伝コマーシャルそのものに含まれる。テレビで放送されたコマーシャルでは、「The Crazy Ones」と題された詩が朗読されるが、その冒頭は次のように始まる (詩の引用は、Wikipedia (英語版) の "Think different" の項による。日本語訳は本稿執筆者による)。

- (17) Here's to the crazy ones.
The misfits. The rebels. The troublemakers.
The round pegs in the square holes.
The ones who see things differently.
They're not fond of rules. And they have no respect for the status quo.

頭のおかしな人たちに捧ぐ。
はぐれ者、反逆者、厄介者。
四角い穴に打ち込まれた丸い杭のような人たち。
彼らは人と違ったものの見方をする。
規則が嫌いで、現状には決して満足しない。

この詩の内容は、世界を大きく変革するような偉業を達成した人たちは、世間から変人と思わ

れるようなはぐれ者 (the misfits) であり、決まり事が嫌いで (They're not fond of rules), 現状に満足しようとしなない (they have no respect for the status quo) 人たちであるというものである。つまりは、真に創造的なことを成し遂げなければ、まわりから頭がおかしいと思われることを恐れるなという主旨であると思われる。(17) に引用した部分の4行目に、「人とは違ったものの見方をする (The one who see things differently)」という一節があるが、この“see things differently”という表現は、この広告キャンペーンの宣伝文句である「Think different」にまさに呼応していると思われる。ものごとを (特定の見方で) 見るということは、ものごとを考えるということとほぼ同義であるからである。⁵

以下では、Think different における different が副詞として解釈されるという可能性を追求するが、まず、英語における形容詞と副詞の対応関係についてまとめておこう。主述関係における述語として機能する場合を除き、修飾語としての形容詞は名詞を修飾し、副詞は名詞以外の品詞、すなわち動詞 (句)、形容詞 (句)、前置詞 (句)、副詞 (句)、さらには文を修飾するものとされる。さらに、現代英語においては、形容詞に接尾辞 -ly を付加することにより、対応する副詞を派生させる一般的な形態論規則が存在する。

(18) 形容詞 + -ly ⇒ 副詞

- a. active ⇒ actively
- b. beautiful ⇒ beautifully
- c. clear ⇒ clearly
- d. deep ⇒ deeply
- e. easy ⇒ easily
- f. honest ⇒ honestly
- g. quick ⇒ quickly
- h. serious ⇒ seriously

この規則によって対応づけられる同一語源の形容詞と副詞が、(19) や (20) のように、それぞれ使い分けられることになる。

(19) a. John is an *honest* man.

b. John always talks *honestly*.

(20) a. This is an *easy* question.

5 「The Crazy Ones」の著作者は Rob Siltanen と Ken Segall であり、一方、「Think different」という宣伝文句そのものは、Craig Tanimoto によるとされるが (Siltanen 2011)、1つの広告キャンペーンの中で、全体の宣伝文句とコマーシャル中に用いられる詩が、内容的に相補う関係にあると解釈するのは自然であろう。

- b. You can solve this problem *easily*.

接尾辞 -ly による形容詞から副詞への派生規則は、生産性の高い一般規則であるが、一方で、単純形副詞 (flat adverb) と呼ばれる、形容詞と同じ形態を持つ副詞類が存在する。(21) においては、-ly のない形とある形の両方がほぼ同じ意味で使用できるが、その意味機能は、主語や目的語の性質や状態の描写ではなく、動詞 (句) の修飾であり、これらの語は副詞として機能していると考えられる。⁶

- (21) a. Drive {slow/slowly}.
 b. Hold on {tight/tightly}.
 c. They stood {close/closely} to each other.
 d. Get the doctor {quick/quickly}.

Huddleston & Pullum (2002: 568) では、このような単純形副詞と -ly 副詞の両方がある語として次のような例が挙げられている (Quirk et al. 1985, スワン2007, 安井・秋山・中村1976も参照)。

- (22) clean, clear, dear, deep, direct, fine, first, flat, free, full, high, last, light, loud, low, mighty, plain, right, scarce, sharp, slow, sure, tight, wrong

(21) の例では、単純形副詞と -ly 副詞に使用上の違いはほとんど見られないが、動詞の前や文頭の位置では -ly 副詞のみが可能であり、単純形副詞は通常許されない。つまり、単純形副詞は、動詞、もしくはその目的語に後続する位置に限定的に生じるものと考えられる。

- (23) a. They {slowly/*slow} moved away.
 b. They {quickly/*quick} moved away.
 c. He {tightly/*tight} shut the door.

また、単純形副詞と -ly 副詞では、意味の分化により使い分けが生じているものもあるが、その基準は常に明確であるわけではない。⁷

6 単純形副詞の一般的な特性については、Huddleston & Pullum (2002), Quirk et al. (1985), 安井・秋山・中村 (1976) を参照。安井・秋山・中村 (1976: 6) は、単純形副詞について「文が比較的短く、幾分感情的色彩がある場合で、口語体ではより力強い表現として好まれる傾向がある」と述べている。

7 単純形副詞と -ly 副詞との使い分けの意味基準を一般化する試みとしては、Broccias (2011), Geuter (2000), 早瀬 (2008), Iwata (2006) などを参照。そもそも単純形副詞が品詞カテゴリーとして「副詞」なのか「形容詞」なのかという点についてもさまざまな議論の余地がある (Himmelmann & Schultze-Berndt 2005参照)。現代英語における単純形副詞の存在の背景には、元々古英語において形容詞に接尾辞 -e をつけて副詞が形成されていたの

このような単純形副詞と -ly 副詞の交替は、現代英語において限定的な現象であり、実際には、(24) のように、副詞的機能を担うのは -ly 副詞のみで、単純形副詞が許容されない場合の方が多数派である。

- (24) a. He escaped {secretly/*secret}.
 b. My mother always drives {dangerously/*dangerous}.
 c. We studied English {reluctantly/*reluctant}.
 d. Listen to me {carefully/*careful}.

(22) の語群を見て気づくのは、これらの大半が単音節語のゲルマン語系語彙であるということである。⁸ 現在の英語には、大まかにいって歴史的により古い時期（5世紀以降）に当時の北欧諸語から導入され、英語の基礎語彙を構成することになったゲルマン語系由来の語彙と、1066年のノルマン・コンクエストをきっかけに流入が始まった当時のフランス語を中心とするロマンス語系由来の語彙が混在している。音韻的には、前者のほとんどが単音節語であるのに対し、後者には単音節語もあるが、複音節語が多く含まれるのが特徴である。また、使用域の点からは、前者が生活上の基礎語彙として口語においても幅広く使用されるのに対し、後者は、公用語、専門用語、学術用語等として、より形式張った場面で使用されるという大まかな使い分けの傾向がある。

英語におけるゲルマン語系語彙とロマンス語系語彙の違いは、さまざまな文法的対比に反映されることが知られており、例えば、与格構文に対応して二重目的語構文をつくる動詞は、ゲルマン語系語彙に限定される傾向がある (Pinker 1989)。形態論的には、ロマンス語系語彙が明示的な派生接尾辞を用いて品詞転換を成立させるのに対し (e.g. develop \Rightarrow development, discuss \Rightarrow discussion, perform \Rightarrow performance), ゲルマン語系語彙は、いわゆるゼロ派生の関係で品詞転換 (動詞 \Leftrightarrow 名詞 (e.g. dance, kiss, love, walk), 動詞 \Leftrightarrow 形容詞 (e.g. clear, free, slow, warm)) が成立する場合が多い。

単純形副詞と形容詞の関係も、ゲルマン語系語彙におけるゼロ派生による品詞転換に部分的に動機づけられているのではないかと考えられる。(24) における形容詞語幹は、すべてロマンス語系由来の複音節語であるので、本来的に形容詞から副詞へのゼロ派生による品詞転換の適用を受けないことが予測される。

では、Think different に立ち戻り、形容詞 different がゼロ派生によって品詞転換された副詞として、differently と同義の語として使用されているという分析は可能だろうか。実は、辞書を

が、中英語期に -e の脱落が生じ、形容詞と副詞のあいだで形態論上の区別がしづらくなったという経緯があり (Jespersen 1942: 408, Visser 1963: 210)、歴史的にはその名残と考える可能性もある。

8 この中では、ラテン語由来の direct のみがロマンス語系で例外となる。

見るまでもなく、3つの音節からなる複音節語 different は、ラテン語（古フランス語）由来の典型的なロマンス語系語彙の1つである（14世紀初出）。したがって、Think different における different を、(22) のような単純形副詞の一例であると単純に分析することはできない。

4. 動詞 think の語彙特性と創造的逸脱表現

2011年に出版された Steve Jobs 公認の評伝『Steve Jobs』(Isaacson 2011) に、この「Think different」という表現がキャンペーンの宣伝文句に決まる経緯についての興味深い以下のような記述がある（日本語訳は本稿執筆者による）。

- (25) They debated the grammatical issue: If “different” was supposed to modify the verb “think,” it should be an adverb, as in “think differently.” But Jobs insisted that he wanted “different” to be used as a noun, as in “think victory” or “think beauty.” Also, it echoed colloquial use, as in “think big.” Jobs later explained, “We discussed whether it was correct before we ran it. It’s grammatical, if you think about what we’re trying to say. It’s not think *the same*, it’s think *different*. Think a little different, think a lot different, think *different*. ‘Think differently’ wouldn’t hit the meaning for me.” (Walter Isaacson, *Steve Jobs*, 329–330.)

（彼らは文法の問題について議論した。もし different が動詞 think を修飾するのなら、「think differently」のように副詞にならなければいけない。しかしジョブズは、「think victory」や「think beauty」のように、different を名詞のように使いたいのだと言い張った。また、この表現は、「think big」のような口語表現をも思わせる。ジョブズは後にこう語っている。「広告を出す前に、我々はこの表現が正しいかどうかについて議論をした。我々が言わんとしていることを考えれば、この言い方で文法的に問題はない。人と同じことを考えるのではなく、違うことを考える、ということなのだ。人とちょっと違うことを考える、かなり違うことを考える、違うことを考える。「Think differently」では、私の考える意味にぴったり合わないのだ。）」

この記述からわかるのは、ひとつは、「Think different」という表現は、常識的にはやはり不自然な英語であり、differently という副詞が文法的にはより適切であると周りの人間は考えたということ、さらに、Steve Jobs がこの different を名詞的なものと見なしていたということである。第一点は、この表現に対する違和感を起点としてここまで展開してきた本稿の考察を裏づけるものであるが、問題は第二の点にある。ここで注意しなければいけないのは、Steve Jobs 自身は文法家でもなく言語学者でもないということである。特定の言語表現についていかなる言語直感を

語ろうとも、それが必ずしも英語話者の潜在的な文法のしくみを正確に反映しているとは限らない。⁹ その点を念頭に、以下では彼の直感のありかを探り、この表現を支える複合的な要因を明らかにしたい。

まず、次に挙げる Think victory や Think beauty のような例について考えてみよう。

- (26) a. Think victory.
- b. Think beauty.
- c. Think change.

これらの表現は、広告や標語における口語的な決まり文句として、特に近年使用が広がっていると考えられる。¹⁰ 動詞 think に後続する名詞は、ここでは具体物ではなく、抽象的理念に限定される傾向があり、無冠詞の単数形になるのはそのためである。例えば、Think victory は、スポーツなどで、選手たちに試合に集中させるために用いられるかけ声のようなものである。Think change は、選挙において変革を呼びかける（革新側の候補者を支持する）標語として使われるだろう。¹¹ このような think の限定的な用例における意味解釈は、(27) のような構文イディオムの一般的な一般化としてまとめられる。¹²

- (27) Think + NP : “To concentrate one’s thoughts on NP” (自分の思考を NP に集中させる)

さらに、(26b) の Think beauty の場合、広告表現としては、「美しさについて集中して考える」というよりも、「美しいものといえば… (When you think about beauty…)」というように、何か特定の商品を紹介するような使い方（解釈）が自然であるとされ、類例として次のようなものが挙げられるが、これらも動詞 think に特化した構文解釈（ミニ構文）として分析することが考え

9 査読者から指摘された可能性として、(25) における Steve Jobs の語りの中で「人と同じことを考えるのではなく、違うことを考える (It’s not think *the same*, it’s think *different*)」という部分から、*the same* の形容詞もしくは副詞的用法 (The two wines don’t taste *the same*. (ランダムハウス英和大辞典) / “Rain” and “reign” are pronounced *the same* even though they are spelt differently. (ジーニアス英和大辞典)) をもとにした反意語としての *different* への拡張という分析も考えられる。ただし、定冠詞 *the* を伴うこの副詞的用法自体は、語彙的に *same* に限定されたものであり、これもまた本稿の結論で述べる Think *different* の成立を協調的に支える複合要因のひとつであると見なすことができる。

10 OED では、動詞 think に名詞句を目的語として直接組み合わせるこのタイプは、初出として1864年 (Bowen, *Logic* i.5) の “We … are thus enabled to think the landscape as a whole.” という用例が記載されており、英語の歴史の中では比較的新しい用法であることがわかる。意味の定義は、 “To form a definite conception of (something real) by a conscious mental act; to picture in one’s mind, apprehend clearly, cognize (with or without perception)” とある。

11 名詞 *change* が近年アメリカの大統領選挙における流行語となったことから、*change* を目的語とする動詞の拡張的な用法も増えているのではないかと推察される。例えば、2008年に発表された Paul McCartney の歌のタイトル (歌詞にも同じ句が含まれる) に、「Sing the Changes」(「歌うことで様々な変化を讃えよう」というような意味) がある。

12 (27) のような一般化は、個別動詞に特化されたミニ構文 (mini-construction) (Boas 2003, 2009; Iwata 2005も参照) として位置づけることができる。

られる。¹³

(28) a. Think comfort. (ホテルの広告として)

b. Think nature. (観光案内として)

しかし、このようなミニ構文分析では、類例はすべて（抽象）名詞が動詞 think の補部となるものであり、different を抽象名詞と見なすという解釈は、明らかに文法的逸脱であり、たとえ (26) のような例をモデルと認めても、それだけで許容される言語表現であるとはいえない。

一方、(25) の引用部には、おそらく Jobs 自身のことではなく、著者の論評として、Think big のような口語表現との類似性が指摘されている。この Think big とは、どのような表現なのだろうか。類例として考えられる表現には、次のようなものがある。¹⁴

(29) a. Eat Fresh. (SUBWAY の宣伝文句)

b. Start small. (小さなことから始めよう)

c. Don't talk smart. (生意気な口をきくな)

d. Vote Green. (環境問題を重視する候補者に投票しよう)

動詞 think を用いた (26) および (28) の例とも共通するこれらの表現の特徴は、口語的な命令文の形式を持つことであり（動詞は自動詞で命令形を許容しやすい活動動詞である）、それは think の例でも述べたように、標語や宣伝として聞き手に対して強いメッセージ性を持つことを反映している。さらに、(29) の例においては、形容詞が不特定の具体物 (something/someone) を限定的に修飾する機能を担っていると解釈することができる。つまり、(29) の各例は、次のように言い換えることが可能である。

(30) a. Eat *something* fresh.

b. Start with *something* small.

c. Don't talk about *something* smart.

d. Vote for *someone* green.

(30a) を除き、(30b) では前置詞 with、(30c) では前置詞 about、(30d) では前置詞 for がそれぞれ補われなければならないことは、これらの事例が何らかの点で逸脱的であることを示唆す

13 この解釈の可能性と類例の指摘は、Mark Irwin 氏による。

14 「Think Global, Act Local」のような例もあるが、これは元々 -ly 形の副詞を用いた表現「Think Globally, Act Locally」から、おそらく語感的選好により短縮化されて -ly のとれたものであり、以下で取り上げる事例とは文法的来歴がやや異なると思われる。

るが、名詞として something/someone, あるいは things のような指示に関する特定性がもっとも弱いものが、標語や宣伝の文脈で省略されるのは、機能的観点からは不自然ではない。同様に、Think big も、(31) のように言い換えることが可能であろう。¹⁵

- (31) a. Think {of/about} something big.
b. Think {of/about} big things.

(29), および Think big のような例について注意すべき点として、動詞に後続するのは必ずしも前述の単純形副詞に限られないということがある。なぜなら、これらの「形容詞」は、-ly 形の副詞を持たないものを含み (*bigly/*smally), また -ly 形が存在しても、それとの交替は不自然であるからである (*Eat freshly/*Vote greenly)。

この延長上に Think different を位置づける可能性も考えられるが、先に述べたように、この different は複音節 (3 音節) のロマンス語系語彙であり (big, fresh, green, small, smart は 1 音節), 単純形副詞でもないの、その点ではやはり逸脱的な印象をより強く残すものと思われる。

- (32) a. Think of ~~something~~ different.
b. Think of different ~~things~~.

早瀬 (2008) は、認知言語学の立場から、形容詞と副詞の連続性を前提として、形容詞形を用いることが形容詞の本来的な特性として (持続的) 状態性に焦点化した事象解釈を導くという分析を提案している。さらに、形容詞が本来状態性との親和性が高いことから、早瀬は、これらの形容詞形の使用は、変化後の結果状態の持続が強く含意される姿勢維持動詞 (verbs of bodily posture) との組み合わせが典型的であり (e.g. stand straight / hang loose), そこからの拡張用法として、結果含意のない活動動詞との組み合わせがあり (e.g. Eat healthy, Talk smart), そこではさらに命令文の持つ非実現のモードから、「Be + 形容詞」の命令文の意味が混成 (blend) されていることを示唆している。

たしかに、Think different の場合、(25) の引用から推察される Steve Jobs の意図に照らせば、「Think differently」と「Be different」の混成は自然な解釈としてありうるが (「Think differently and try to be different (from others)」), Eat fresh や Vote green のような例では、「Be fresh/green」の含意

15 命令文以外でも、すでに think big が一般的な動詞句表現として認知されていることは、次のような例から示唆される (イタリックは本稿執筆者による)。

(i) He also distrusted anyone who routinely referred to 'the planet' as proof of *thinking big*. (Ian McEwan, *Solar*: 34)

また、動詞 think が、不特定の具体物を指す things を目的語としてとる用法も口語的表現としては可能である (イタリックは本稿執筆者による)。

(ii) It was too much to stay inside, *thinking these things*, and regretting so many others. (Rachel Joyce, *The Unlikely Pilgrimage of Harold Fry*: 92)

まであるかどうかの判断は難しいように思われ、関連する事例についての一般化の度合いについては検討の余地がある。

早瀬の主張する「Be + 形容詞」との混成に関しては、これらの例の多くが命令文として用いられることから、「いまはまだ実現していない状態への変化」が含意されるが、この解釈については、次のような再帰代名詞を伴う結果構文との並行性も考慮にいれる必要があるだろう。

(33) How to think yourself happy.

(Wechsler & Noh 2001 : 394)

この例文における動詞 think は、「自分を幸せだと考える」という通常の小節構造に基づく認識動詞の解釈ではなく、非選択目的語を伴う結果構文として、「考えるという行為を通じて自分を幸せにする」という活動動詞的な解釈であることは、文脈上（健康雑誌の表紙からの引用）明らかである。目的語をとらない活動動詞と再帰代名詞を組み合わせる結果構文は、否定的含意の機能不全解釈を伴うものが一般的であるが（Goldberg 1995, Suzuki 2006参照）、(34) のように肯定的な使役変化を含意する類例がないわけではない（いずれも Google 検索による）。

(34) a. Walk yourself slim, (ウォーキングの案内)

b. Eat yourself slim, (ダイエットの宣伝文句)

このタイプの結果構文と再帰代名詞のない動詞と形容詞のシンプルな組み合わせパターンは、現代英語において競合状態にあるのではないかと思われるが、いずれも最近のかなりくだけた口語表現であり、使用の実態を正確に把握するのは難しい。しかし、動詞の意味から考えると、(34) の場合は、上で論じた something slim を補う解釈は不適切であり（*walk something slim/*eat something slim）、動詞 think だけが、“Think (about) something happy” と “Be happy” という2つの解釈を矛盾なく許容する柔軟性を持っているといえる。これは、行為の様態（manner）の描写が、そのまま行為者の内面的な本質を評価する描写になりやすいという動詞 think の意味特性を反映しているのだと考えられる。

5. 結 論

本稿では、「Think different」という宣伝文句の英語表現の成立の背景について言語学的に検証することにより、この表現が現在の一般的な英語文法の枠組みでは完全に許容することは難しい逸脱的な性質を持つが、局所的には解釈可能な表現として容認しうる文法的・語法論的要因が存在することを明らかにした。具体的には、以下に挙げる英語における文法、および語法の諸特性が、この新奇な表現の使用（発話と理解）を複合的かつ協調的に支えていることを論じた。

(35) a. 単純形副詞の存在

- b. 活動動詞を主たる対象とする同族目的語構文
- c. 指示的特定性の低い具体物を指す thing(s) を補部とする活動動詞
- d. 広告や標語で用いられる口語の命令文という使用域
- e. 再帰代名詞を伴う結果構文の肯定的解釈
- f. 動詞 think の語彙特性と関連するミニ構文

Think different は、これらの文法的な規則、あるいは構文・語彙特性のいずれによっても直接に認可されるわけではないが、これらの複合的なネットワークによって間接的に支えられていると考えることができる。特に注目すべき点は、動詞 think の語彙特性として、認識動詞（潜在的な認識対象を持つ）と活動動詞（同族目的語や thing 目的語のように行為そのもの、あるいはその抽象的産物を名指す目的語をとりやすい）の性質を併せ持ち、行為もしくはその産物についての評価が、いわば再帰的に行為者自身についての評価にも重ね合わせやすいことである。すでに口語的表現としては一般化している Think big のような周辺的な慣用表現が生み出される背景にも、動詞 think が持つ同様の語彙特性があるのだと考えられる。このことは、文法的な逸脱が個別の語の特性に誘引されるかたちで局所的に創発する可能性を示唆している。

明示的な副詞 differently ではなく、形容詞形 different にこだわった Steve Jobs の直感的な判断は、現代英語において創造的逸脱表現になるかならないかという文法システムの境界に絶妙に触れるものであり、そこに生じる微細な違和感が多くの人々の関心を無意識に喚起する効果を持ちえたのではないと思われる。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、同僚の Mark Irwin 教授に例文の解釈や類例について有益な示唆をいただいたことをここに記し感謝する。また、査読者からの指摘は本稿の内容を改善する上でたいへん有益であった。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号24520528）の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, Stanford, CSLI Publications.
- Boas, Hans C. (2009) "Verb Meanings at the Crossroads Between Higher-level and Lower-level Constructions," *Lingua* 120, 22-34.
- Broccias, Cristiano (2011) "Motivating the Flexibility of Oriented -ly Adverbs," In Panther, Klaus-Uwe

- & Günter Radden (eds.), *Motivation in Grammar and the Lexicon*, 71–88, John Benjamins.
- Geuter, Wilhelm (2000) *Oriented Adverbs: Issues in the Lexical Semantics of Event Adverbs*, Doctoral dissertation, Universität Tübingen.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago University Press.
- 早瀬尚子 (2008) 「形容詞か副詞か？—副詞としての形容詞形とその叙述性」, 『認知言語学論考』 No. 8, 125–155.
- Himmelmann, Nikolaus P. & Eva F. Schultze-Berndt (2005) “Issues in Syntax and Semantics of Participant-oriented Adjuncts: An Introduction,” In Nikolaus P. Himmelmann & Eva F. Schultze-Berndt (eds.), *Secondary Predication and Adverbial Modification: The Typology of Depictives*, 1–67. Oxford University Press.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- Isaacson, Walter (2011) *Steve Jobs*, Simon & Schuster.
- Iwata, Seizi (2005) “Locative Alternation and Two Levels of Verb Meaning,” *Cognitive Linguistics* 16, 355–407.
- Iwata, Seizi (2006) “Argument Resultatives and Adjunct Resultatives in a Lexical Constructional Account: The Case of Resultatives With Adjectival Result Phrases,” *Language Sciences* 28 (5), 449–496.
- Jespersen, Otto (1942) *A Modern English Grammar*, part VI (Morphology), Ejnar Munksgaard.
- Killie, Kristin. (2007). “On the Development and Use of Appearance/Attribute Adverbs in English,” *Diachronica* 24 (2), 327–371.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, The MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- スワン, マイケル (2007) 『オックスフォード実例現代英語用法辞典 第3版』, 研究社／オックスフォード大学出版局.
- Siltanen, Rob (2011) “The Real Story Behind Apple’s ‘Think Different’ Campaign,” [<http://www.forbes.com/sites/onmarketing/2011/12/14/the-real-story-behind-apples-think-different-campaign/>]
- Suzuki, Toru (2006) “Between Conventionality and Compositionality: Resultative Constructions Deconstructed?” *English Linguistics* 23, 213–244.
- Taniguchi, Kazumi (1997) “On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective,” *English Linguistics* 14, 270–299.

Visser, Frederik Theodoor (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, part I, E. J. Brill.

Wechsler, Stephen & Bokyoung Noh (2001) "On Resultative Predicates and Clauses: Parallels Between Korean and English," *Language Sciences* 23, 391-423.

安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法7 形容詞』, 研究社出版.

辞 書

The Compact Oxford English Dictionary, Second Edition (1991), Clarendon Press.

『ジーニアス英和大辞典 第2版』(2001), 大修館書店.

『小学館ランダムハウス英和大辞典』(1993), 小学館.

Web 資料

http://en.wikipedia.org/wiki/Think_Different (Wikipedia: "Think different")

データの出典

Auster, Paul (2003) *The Book of Illusions*, Picador.

Ishiguro, Kazuo (1999) *The Remains of the Day*, Faber & Faber.

Joyce, Rachel (2013) *The Unlikely Pilgrimage of Harold Fry*, Black Swan.

McEwan, Ian (2002) *Atonement*, Vintage.

McEwan, Ian (2011) *Solar*, Vintage.

“Think Different” Explained Linguistically: How Grammar Motivates Innovative Deviance

Toru SUZUKI

The famous tagline “Think different” adopted in Apple’s 1997 campaign remains one of the most memorable expressions in advertising with an intriguing but slightly deviant feel to it. This paper aims to explicate how this peculiar expression is (more or less) licensed within the grammar of English. Three possibilities of analyzing the grammatical properties of “Think different” are examined, namely (1) object omission after *different*, (2) *different* as a sole complement to the verb *think*, and (3) adverbial use of *different*. It will be shown, however, that each of these possible analyses does not fully account for the occurrence of the expression. In conclusion, I suggest that, to encourage the use of such a linguistically deviant innovation, a conspiracy of several independent factors are invoked in the English grammar and lexicon, including colloquialism.